の三環境を対等に扱って行くと云っているに過ぎない。だからヨーロッパには公害と云うものは殆ど考えられぬ事なのだし、特に北欧の人々には公害と云う言葉の意味のわからぬ人までいるのである。

お互いもっと考えてみよう。自らの環境を破壊したらお互い人間がまず死なくてはならないのだ……という事を。そのためには「一体お前は、どうしろと云うのだ!!」と聞かれた場合は筆者は躊躇なく云う。「お互い自分の囲りを汚す事をやめ、不必要な自然の変更も止めよう!!」と。

空も大地も丘も森も川も海も湖も、みんな美しい国が同じ地球の上にあるのだと云う事を。そしてそう云う国は、みんな世界の先進国なんだと云う事を。それらの国民は1人あたりの収入だって日本人より、はるかに多く結局は豊かに暮して行っているのだという事　お互いに考えてみよう。

〃ZENGAKUREN〃あたりは、まだしも〃KOGAI〃と云う言葉が、欧米の辞書にのるようになったのは、本当に恥かしい事なのではあるまいか。

水戸協同病院皮泌科部長
茨城大学講師

編集後記

中性洗剤の問題を少し調べてみて、賛成派、反対派、両者とも、科学者ともあろうものが、かなり感情的なものいいをしていることがおかしかった。感情的、煽動的なものが住民運動とむすびついた場合は、運動そのものが、かなり危険なものになり下ってしまうのではないかと思う。私たちは政治家や科学者のいうことをプロとして尊敬はしても、ウノミにしないシタタカさをもつことが大事なのではないかと思う。素人でなくては考えられない図々しさで問題を見きわめ、今!!市民の一人としてどう行動するのが一番適切か。公害ファッションにも左右されず、感情的、煽動的でなく、理性的に判断する判断力がますます必要なことを痛感した次第である。

この冊子も、私たちが一人の市民としてのあり方の中で、ひとりよがりでなく、まわりの人たちに解る言葉で地域の人たちの理解し得る論理でかたりかけることをモットウに、小さい輪の中での、一つのタタキ台になり得れば幸いである。

（奥井登美子）